

フランク・ヴェデキント「ルル二部作」再解釈

— ルルの生存をめぐる

文学部文学科演劇学専攻

ご ちよう さ き
後長 咲妃

はじめに

フランク・ヴェデキントによる戯曲『地霊』・『パンドラの箱』の主人公ルルには、相矛盾する多様な解釈が与えられる。それはまず、作中の男性たちがそれぞれルルを違った名前と呼ぶことに顕著な、物語内においてなされる解釈である。また物語外においても、読者や観客が、ルルを性衝動の権化として、あるいは「他律的女性」として解釈してきた。ドイツ文化史における「女性的なるもの」をめぐる言説を分析したジルヴィア・ボーヴェンシェンは、「この劇の読者や観客がルルの本質や象徴内容について思弁をめぐらすとき、劇中に登場する男性たちがたえずいろいろ考えて、さまざまな結論を出すのと同じことを、もう一度繰り返すことが多い」¹として、物語内外のふたつの次元で多様な解釈の媒体となるルルを言い表している。とはいえ、これまでの解釈は、ルルにどのような性質を付与するにせよ、男性との関係という外的な要素をルルの存在を規定する前提としてきたものだと指摘できる。そうした態度は、この戯曲で提示されている出来事を、ルルの元来もつ特異な性質を見出すことで説明しようとするものといえる。しかし、それは一見矛盾したルルの行動を、彼女自身の固定的な性質として読み取ることと同義であり、その性質から逸脱する部分はこぼれ落ちてしまう。そこで本稿では、ルルの行動の背景よりもその行動が持つ機能に重点を置いて戯曲を再解釈し、その上で、戯曲のもつ批判の射程をあらためて検討することを目的とする。

第一章 先行研究の分類

フランク・ヴェデキント作『地霊』・『パンドラの箱』は合わせて「ルル二部作」と呼ばれる。『地霊』は1895年、『パンドラの箱』は1904年にそれぞれ初版が発行された。『地霊』で結婚した男性たちが次々と死に、『パンドラの箱』で最終的に切り裂きジャックに殺されるルルは、ファム・ファタルの代表的人物のひとりとして知られている。ファム・ファタルとは、男性を破滅させてしまうほど魅力的な、運命の（致命的な）女である。その定義からして、ファム・ファタルを成立させるには、彼女に魅力を見出した結果破滅する男性が要件となっている。この点で、ファム・ファタルはそれ自体自立的な人物類型ではない。多分に洩れず「ルル二部作」においてもルルに魅力を見出す男性たちがさまざまにルルを語る。ルル自身だけでなく男性たちの語りによってもルル像が立ち上げられてゆくことは確かだが、その他のファム・ファタルを描く小説において、男性の語る枠構造のなかにしか存在しないマノン、カルメン、マルグリットなどとは異なって²、戯曲という形式を持つこの二部作では、そこで語るルルが存在する。つまり、小説と異なり、戯曲という形式は、女性自身が自ら発話する構造を有している。したがって本作では、ルルの行動に対して、それでも男性による解釈が効力を持ち、非対称な関係性が維持されつづけるその力学こそ注目に値する。

議論の前提として、まずはあらすじを確認しておこう。

『地霊』のプロローグでは、猛獣使いが見世物小屋の入口の前で、これから始まる芝居の登場人物たちを獣になぞらえて紹介する。第一幕でルルはまず、衛生顧問官ゴル博士と結婚している。ゴル博士は、ルルが画家シュヴァルツと親密にしていることに憤慨するあまり急

死する。第二幕でルルは次に、シュヴァルツと結婚している。シュヴァルツはルルのことを上流階級出身かつ処女と思い込んでいたが、その幻想を壊すルルの実情をシェーン博士に告げられ、ショックを受けて自殺する。続く第三幕でルルは、シェーン博士の息子アルヴァが脚本を担当する踊りの舞台に立つ。そこへ婚約者とともに来場したシェーン博士に、婚約破棄の手紙を書かせる。そして第四幕でルルは、シェーン博士と結婚する。シェーンは、あるべき道徳的生き方が自身の欲望によって破綻した結果、ルルにピストルを渡して自殺を迫る。ルルはそのピストルでシェーンを殺す。

次に『パンドラの箱』のプロローグでは、読者・出版業者・作家・高等裁判官の四者がそれぞれ自分の主張をする。『地霊』のプロローグのように物語の内容に言及するわけではなく、独立したパートである。第一幕では、シェーン殺害の罪で逮捕されていたルルが、ゲシュヴィッツ伯爵令嬢の助けによって監獄から脱出し、シェーンの息子アルヴァのもとへ戻る。続いて第二幕では、パリにてアデレード・ドゥーブラ伯爵夫人の誕生日パーティが開かれる。この名は警察から追われているルルの偽名である。警察への密告を脅しの手段に、金をせびり、娼婦になるよう迫る男性たちから、ルルはボーイの協力を得て逃げ出す。アルヴァの所有する株が大暴落し、彼は財産を失う。最後に第三幕で、ルルはロンドンの貧民街で娼婦になった。その仕事の初日、最後の客である切り裂きジャックに殺される。ルルを助けに来たゲシュヴィッツも彼に殺される。

以上が簡単なあらすじである。

これらの戯曲について、従来の作品理解に批判的な立場から、たとえばドイツ文学者の吉田眸は、いわゆる官能的なファム・ファタルとしてのルル像を次のように特徴づける。「ルル像は、肯定的にであれ、否定的にであれ、次のような価値の化身として理解される、つまり「自然」、「本能」、「性衝動」、「根源」、「生命力」等々」³。ここで列挙される特徴は、文明化された社会に対する「自然」に集約できるだろう。吉田はこうした従来の解釈に異を唱え、ルルは社会に対置される存在ではなく、むしろ社会規範を内面化し、社会状況を反映する人物であると主張する。

以上をまとめると、第一に、社会に位置づけられない、人間を超越した存在としてルルを捉える視点が存在し、これを前提とした解釈が一般的なものとして採用されつつづけている。第二に、吉田の例に見たように、社会に位置づけられる人間としてルルを捉える、前者の典型的解釈に対して批判的な解釈が存在する。まずはこれらふたつの対照的な解釈を確認する。

第一節 性衝動の権化としてのルル

『地霊』初版から2年後の1897年、ニーチェの「超人」概念をルルに「超女」としてあてはめ解釈したレオ・ベルクは、「彼女は実際罪の権化の如きもので、無政府主義の権化で婦人のドン・ユアンで、宛かも超地上的のもの如き一種の戦慄が彼女から生ずる程生来破壊本能を有する好色な死神である」⁴、また、「最高の婦人は、最も純潔な自然である。超女は人となれる一塊の自然である。然るに最高の男は、最も純潔な精神であり、より高い精神であり、超人は一塊の自然となれる精神である」⁵として『地霊』を評している。ここでベルクは、精神としての男性を墮落させる自然としての女性という枠組みで、ルルを「生来破壊本能を有する好色な死神」と解釈する。つまり、制御されない性衝動に男性を巻き込み破滅さ

せる女性としてルルを捉えている。

ドイツ文学者の岩淵達治は「ルル二部作」を次のように簡潔にまとめる。「自然もしくは自然の衝動の化身である女ルルーが、既成の社会のなかで男性をつぎつぎに破滅させてゆく物語であり、それぞれの幕でゴル博士、画家シュワルツ、ルルーを育てたシェーン博士がルルーに倒されてゆく。『パンドラの匣』では、このエロスの化身が、最後に変態性欲者切り裂きジャックの手で、ロンドンの淫売屋で殺されてゆくまでの没落の過程を扱ったものである」⁶。男性と女性を社会と自然に対置して、自然に位置づけられるルルが男性たちを破滅させるという構図は、ベルクの見方と共通している。ただそれは「女性憎悪」⁷によるものではなく、「エロスにおいて女性が完全に解放されることを考えたヴェーデキントは、もっと本質的、破壊的な意味での女権拡張論者だったのである」⁸として、「自己の性衝動通りに行動する」⁹ルルの形象に、ラディカルな女性解放というヴェーデキントの意図を見て取る。

世紀転換期に氾濫した性愛のテーマに関して、オスカー・ワイルドの戯曲『サロメ』(1893)とともに「ルル二部作」を論じたホルスト・フリッツも、社会と自然の二律背反を前提に、ルルは社会に位置づけることのできない自然としての女性であるとの見方をする。同時に、「この作家は、ルルを「美しい野獣」としてきわめて肯定的に描き出すが、彼女の形姿を通じて、結局、十九世紀に婦人の社会的な解放の進展を妨げる手段としてしばしば使われた、女性を自覚のない衝動的な存在と見るあの論拠をまたも提示してしまうのである」¹⁰として、岩淵の評価とは反対に、女性解放を妨げるロジックとルル像の合致を指摘する。

ここに列挙したなかで、特に岩淵とフリッツは、同じ見方でルルを解釈し、正反対の評価を下しているが、それは単に「性の解放」に関する両者の見解の相違による。まず岩淵は、ヴェーデキントの劇作を「社会の解放と性の解放を〔中略〕直接に結びつけるような問題提起」¹¹をするものと特徴づけたうえで、上に引用したように、ルルを「自己の性衝動通りに行動する」¹²「真に解放された社会に対応する女性」¹³と評価する。注意したいのは、岩淵はここで社会的な権利の平等は問うていないということである。むしろ、エルンスト・ブロッホによる「夢みられた女性の未来の背景は、はなばなしいディオニュソスの革命像に満ちみちていた。だが、その革命像も一年後にはもう、コルセットからの解放と、喫煙、選挙、就学の権利以上のものはほとんど残っていなかった」¹⁴という女性運動についての記述を引用しながら「エルンスト・ブロッホが『希望の原理』で述べたように、市民社会内の女権運動は、高々「コルセットからの解放と、喫煙、選挙、大学入学の権利を得たにすぎない」のである」¹⁵として、権利の平等と対比することにより「ルル二部作」に描かれる「性の解放」の進歩性を語る。一方フリッツはそうした、女性が性的な領域でのみ奔放にふるまうという、その疎外をこそ指摘している。つまり、岩淵は「性の解放」は権利の平等と切り離されて存在すると捉え、フリッツは「性の解放」は権利の平等のうえに成り立つと捉える。この見解の相違が、ルル像が解放的であるか抑圧的であるかという、正反対の評価を導き出すが、そもそもルルが性衝動にしたがって行動しているという解釈は共有している。

ベルクも含めた三者の解釈に共通するのは、社会とは別のところに位置づけられるルルが、その性衝動によって男性たちの生きる社会に揺さぶりをかけるという構図である。これは、作品初版と同時代だけでなく、後世においてもルル解釈の典型的な枠組みといえる。

第二節 他律的女性としてのルル

続いて、上にみた解釈とは対照的に、ルルが社会に存在していることを前提とした解釈を確認する。

前述の吉田によれば、社会規範を内面化したルルは、男性の欲望の対象として自己を措定しつづけた結果、「自律性を完全に失って、何に対しても主体的な責任のとれない」¹⁶、「筋の成り行きに身をまかせる単なる受動的な」¹⁷ 生き方をすることになる。

同様に、ドイツ文学者の日中鎮朗はルルに「意識自体を空虚にするしかない当時の女性の状況」¹⁸の反映を見る。具体的には「結婚が意味することはルルの男性との関係の積極性や結婚による贅沢な生活への憧れやそれを得るための策謀ではなく、男たちが結婚を望み、ルルはそれに従っただけというルルの意志の欠如である」¹⁹として、命じられるままに男性に帰属するルルを特徴づける。

つまり両者とも、ルルが男性たちの欲望の対象であり続けることの原因を、ルルの他律的な行動に求めている。

第三節 先行研究の批判的検討

このようにルルは、男性を破滅させる者として、あるいは男性に従属する者として解釈されてきた。ただ、これらの解釈にはそれぞれ次のような指摘が可能である。前者の、ルルを性衝動の権化とみなす従来の解釈は、ルルのふるまいを短絡的に図式化している。後者の、ルルを他律的女性とみなす解釈は、男性たちは「ファム・ファタル」によって一方的に破滅させられるのではなく、ルルに影響を及ぼしているということに意識的である点で、ルル解釈に不可欠な視座を提示する。たしかに、ルルの他律性を強調することは、性的誘惑によって男性を屈服させるファム・ファタルというルルの一般的イメージを覆すのに有効である。しかし同時に、他律性の強調は男性中心社会における女性という固定的な立ち位置ばかりを拡大し、ルルが女性であること自体に多くの事象の原因を求める点で、単に前者の解釈を裏返しているにすぎない。言い換えれば、どちらの解釈でもルルは固定的な他者であった。つまり、男性の生きる社会を外側から攻撃するのか、男性の生きる社会の内部に囚われているのか、という見方である。

さらに、これまでのルル解釈では、一方では自律性と能動性と主体性、他方では他律性と受動性と客体性がそれぞれ互換的に用いられるか、一続きに結びつけられ、前者のいずれかを否定する際に、後者のいずれかが引き合いに出されてきた。一般にこれらの語は、それぞれ使用される文脈によって同義にもなりうるがゆえに、明確に区別されてこなかったと考えられる。しかし、ルル解釈においてはこれらを腑分けすることが重要だと思われるため、ここで、それぞれ問題となっていることを整理しておきたい。まず自律性と他律性は、ある行為を選択しているのが自分かそれ以外か、次に能動性と受動性は、ある行為を行なう態度が積極的か非積極的か、そして主体性と客体性は、対象に対して有意な作用を及ぼす者であるのか、作用を及ぼされる対象であるのか。このように整理すると、客体性は、他律性や受動性といった個人で完結する性質とは異なり、他者との関係において初めて生じる性質である点で、特に区別すべきものと思われる。もちろん他律性や受動性といった性質が、他者との関係における客体性を導き出すという相関性は否定しないが、これから第二章でみるよう

に、男性に対するルルの客体性は、ルルの能動性によっても成立している。したがって、こうした二項対立の図式はルルにあてはまらない。

ここで、本稿で着目する「客体」をより詳しく定義しておく。以下では、「客体」は、相互的ではありえない、一方的な作用の向かうものを意味する。類似の語である「対象」は、単に作用の向かうものと定義し、「客体」とは区別して用いる。「対象」は「客体」とは異なり、相互的でもありうるものとする。

第二章 制御不可能なルルの生存

第二章では、ルルの行動と生存がどのように結びついているのか考察する。まず簡単に本章の骨子を示す。第一節では、ルルは男性に対して能動的に対象性を提示し、男性たちはそれを客体性として認識することを指摘する。続く第二節では、ルルは男性への帰属によって生存していることを示す。それはとりもなおさず、対象性が客体性と認識される権力関係への加担を意味する。しかしルルはそうした自身を生存可能にする客体としての立場を拒否する。最後に第三節では、客体として認識されることが死に帰結することを提示する。

以上の議論を通して、二部作を通じてルルは、男性の介在によって自身の行動が生存にも死にも結びつくという制御不可能性を拒否していたことを示していく。

第一節 ルルの提示する対象性と男性たちの認識する客体性

まずはルルの能動性が発揮されている場面を確認する。次に引用するのは、『地霊』第一幕第二場で、シュヴァルツがルルの肖像画を描く場面である。この肖像画は『パンドラの箱』にも登場する「ルル二部作」において象徴的な事物である。この場に、ルルの現在の夫ゴルと、育ての父でありゴルとの結婚を斡旋したシェーンも居合わせている。

ルル (左のズボンの裾を膝まで持ちあげてシュヴァルツに) こうですか。
シュヴァルツ ええ……
ルル (心もち高く持ちあげて) こう？
シュヴァルツ ええ、ええ……
ゴル (彼の隣の肘掛けに席を占めたシェーンに手を振りながら) わたしは、ここから見ると家内はなお綺麗に見えると思うんですよ。
ルル (身動きもしないで) あらあら、悪いけど、わたしはどっちから見ても綺麗よ。
シュヴァルツ (ルルに) 右膝をもうちょっと前をお願いします。
シェーン (ある身振りをして) 多分ここからの方が体の線が綺麗に見える……
シュヴァルツ 今日は、光線の具合が、どうも思わしくありません。
ゴル 彼女を描くには、さっとラフに描かなくちゃ。絵筆はもっと長く持ちなさい！
シュヴァルツ ごもっともです。
シェーン 彼女を静物だと思って描くんだね。

シュヴァルツ 勿論です、先生。(ルルに) いつもは頭をもう心持あげていらっしやいましたよ。

ルル (頭をあげて) 唇をちょっと開いているように描いて下さいね。

[中略]

ルル (口を心持ち開けてシュヴァルツに) ほら——ごらんなさい、わたし唇を少し開けていてよ。²⁰

男性たちがルルに各々の理想像を見出そうとしていることよりも、ここで着目したいのは、男性たちと同様に、ルル自身もルルの外見的魅力の構築を行なっていることだ。ルルは「わたしは、みんながわたしに求めていることをしているだけよ」²¹と直前の場面で述べるが、ここでシュヴァルツの指示以上に自らイメージを提示する。さらに、シュヴァルツ以外の男性たちの退出後、ルルは自分の着る踊りの衣裳を細かく描写する。自身の外見的魅力を強調することは、見られる対象としての価値を高めることだといえる。

シュヴァルツ どんな衣裳なんです？

ルル 緑の膝までのレースのスカート、^{ひだ}襷飾りがついててね、勿論胸は大きくあいてるわ。そしてウエストはひどくきつく締めて、ペチコートは薄緑、だんだん明るい色になっていくの。真白の肌着には、^{てのひら}掌ぐらいのレースがついているの……

シュヴァルツ 僕にはもう描けない！²²

同様に、シュヴァルツと結婚後の次のやりとりからも、ルルは、自身の見られ方を効果的に提示する能力に価値を見出し、実際その能力を自負していることがわかる。

シュヴァルツ 招待状だ、僕にペテルスブルクの国際展に参加しないかって——僕には何を描いていいかまるで分らない。

ルル 分りきってるわ、魅力的な女の子を描けばいいのよ。

シュヴァルツ 君がモデルになってくれれば？

ルル でも、ほかにもかわいい女の子はたくさんいるんじゃないの。

シュヴァルツ でもほかのモデルだと、たとえ地獄みたいにあくの強い女の子でも、僕の能力を君みたいに十分引き出せないのさ。

ルル じゃわたしってことになるのね——横になってるポーズじゃどう？

シュヴァルツ 構図のことは君の好きにまかせるのが一番いいようだな。²³

踊りの舞台を中心に展開する第三幕では、舞台上に登場する直前ルルは次のように表明する。絵画のモデルになる際と同じく、ルルは自分の効果的な見せ方を企てている。

ルル ショールをちょうだい……今度は^{まえづら}前面に出っぱなしで踊ろう。

アルヴァ (肩にショールをかけてやる) ショールをここに掛けて。

ルル あの人をやったあつかましい宣伝が嘘にならないように踊ってやるわ。
アルヴァ 自分を抑制することを忘れちゃいけませんよ！
ルル わたしの頭から、理性をすっかり追っ払えるほど踊れますように。(退場)²⁴

このようにルルは、表情や姿勢、構図、身に着ける衣裳、動きといった、ルルの身体に付随するさまざまな要素を駆使することで、男性に対して対象としての自己を繰り返し提示する。

一方、男性たちは、ルルを恣意的に意味づけることのできる客体として扱う。この、男性たちが一方向的にルルを扱うことについては次節以降でも例を挙げるため、ここでは男性たちがルルをそれぞれ違った名前呼びかけることを示すにとどめたい。ルルのことを、シェーンとアルヴァは「ミニヨン」、ゴルは「ネリー」、シュヴァルツは「イヴ」と呼ぶ。次に引用するシュヴァルツとシェーンのやりとりに、ルルを名指す呼称の違いがもっとも簡潔に現れている。

シュヴァルツ 誰のことです？
シェーン 誰だって？——君の奥さんさ。
シュヴァルツ イヴが？
シェーン 僕はミニヨンと呼んでいるがね。
シュヴァルツ 彼女のほんとうの名はネリーというんだと思っていましたが？
シェーン そう呼んだのはゴル博士だよ。
シュヴァルツ 僕はイヴと呼んでいます。
シェーン ほんとうの名前がなんというかわたしも知らないね。
シュヴァルツ (心もうつろに) 彼女なら知っているでしょう。²⁵

ここで最後にシュヴァルツは、ルルの「ほんとうの名前」を自分の知り得ないものとして言明している。しかしシュヴァルツは、「ルルとの対話で、ルルのほんらいの名前をちゃんと聞かされていたのに、それを完全に無視した」²⁶とすでにボーヴェンシェンが指摘しているように、ルルを「ほんとうの名前」で呼ばないことを、これ以前に決定している。次に引用するのは、シュヴァルツに対してルルが名乗る当該のやりとりである。

シュヴァルツ 君が好きだ、ネリー。
ルル あたしの名前はネリーじゃないわ。
シュヴァルツ (彼女にキスする)
ルル あたしの名前はルルよ。
シュヴァルツ 僕はイヴと呼ぶことにしよう。
ルル いま、何時かしら？
シュヴァルツ (時計を見て) 十時半だ。
ルル (時計を取って蓋をあける)
シュヴァルツ 君は僕を愛していないんだね。

ルル そんなこと……十時三十五分よ。
シュヴァルツ キスしてくれ、イヴ！
ルル (彼のあごをつかんでキスし、時計を空中に投げ上げて受けとめる) あ
 なた、煙草くさいわね。²⁷

シュヴァルツはルルの訂正を意に介さず、「イヴ」と呼ぶことをここで決定している。そののち脈絡なく時刻を尋ねたり、シュヴァルツの伝達した時刻を訂正したりするルルの行動は、シュヴァルツが主導するやりとりを一時はぐらかす機能をもつが、結局ルルは、シュヴァルツの設定した「イヴ」という名前に応答する。ただし、このことは「イヴ」が自分を名指すために用いられていることを了解したにすぎない。

反対に、ルルが複数の名で呼ばれることについて、岩淵は「女主人公ルルーは固有名詞をもってはいるけれども、純粹に男性の対象としての女であり、それぞれの男はルルーを別の愛称で呼ぶことによって立場の相違を示す。ネリーと呼ばれ、イヴと呼ばれ、ミニヨンとも呼ばれる。ルルーはかりそめの名であって、その名はどのようにも交換できるが、それゆえにルルーは「男性からみた女性」として遍在性をもちうるのである」²⁸と述べる。これは「男性からみた女性」というバイアスを意識しながらも、作中の男性たちと同じ仕方でルルをまなざし、男性たちによる名づけの恣意性を後景に追いやる評価といえるが、同時に、「ルルはしかじかの存在である」と認識することがすなわち、「ルルはしかじかの存在である」ということになる状況を示している。つまり、ルルがいかなる存在であったとしても、恣意的な名づけへの応答によって、男性たちによる一方的な意味づけが成功したことになる。

そのような男性たちに、対象としての自己を提示することは、一方的に作用を及ぼされる「客体である」という男性たちのルルに対する認識を排除できない。つまり、単に対象であるということが、男性にとって、ルルを思いどおりに扱えることとして認識される。男性たちがルルを対象と認識して行なう行動と、客体と認識して行なう行動は、それぞれまったく異なったものと思われるが、しかし、ルルが対象か客体か確定することができるのは、ルルではなくてルルの行動を解釈する男性たちである。こうして、男性に向かって対象としての自己を提示するルルの行動は、男性の「ルルは客体である」という認識にちょうどはまり込み、こうした男性たちの認識が変容する可能性は予め遮断されている。

第二節 生存の基盤としての客体性

男性に対象としての自己を提示しつづけることは、ルルにとっていかなる意味を持つのか。それは両価的なものであるが、ここでは、ひとまずメリットとして位置づけることの可能な側面を取り上げる。「ルル二部作」訳者の岩淵によれば、本作は1880年代を舞台としている²⁹。当時の市民社会においては、女性は独立した個人と認められていなかった。そうした属性をもつ者として市民社会に生きるルルの行動は、男性を翻弄することになるにしても、まずもってルル自身の生存に有意に作用する。

啓蒙の概念における平等理念から、そもそも女性は排除されていたことを指摘するミシェル・クランプ＝カナベは、近代市民社会における女性の市民権について次のように述べる。「女性に与えられる市民権は、かの女たちが男性市民の妻であるという事実からのみ由来し

ており、このことは、習俗の純潔を守り、家庭間のよき相互理解を保つという権利以外、女性にはなんの権利も委ねられていないということを示している。女性の市民権——私的な空間に封じこめられていた——はあらゆる政治的現実から排除されている。〔中略〕女性の市民権は、家長である夫の市民権の受動的な影でしかない³⁰。女性は妻として男性に帰属することではじめて、市民社会に間接的に参入することが可能であった。

とりわけルルは、出自不明であり後ろ盾がないため、帰属先の有無はいつそう致命的な問題といえる。ルルは十二歳のとき、花売り娘をしていたところをシェーン博士に拾われた。当時について、ルルは「あなたがいなかったらわたし、いまごろどうなってたか——言わない方がよさそうね。あなたはわたしを引きとり、食べ物と着物をくれた。あなたの時計を盗もうとしたあたしをね。あれが忘れられると思う？ 他の人につかまったら、わたしは警官に引き渡されていたわ³¹」として、別の場面でシェーンは「彼女はアルハンブラ＝カフェの前で花を売っていたんだよ。毎晩十二時から二時まで、はだしで客たちのあいだをかきわけながら³²」と振り返っている。

ルルを拾ったシェーンは新聞社主筆を務め、上流市民階級に属している。よって彼に拾われたルルは、市民として女子教育を受けたことが推測される。たとえばルルは、シェーンに対し「あなたはわたしを学校に通わせ、エチケットを習わせてくれた³³」として、自身の受けた学校教育について振り返る。教育内容として想起するのが礼儀作法であることは「市民層の女性は結婚して妻および母親となり、しかも経済的にも精神的にも夫に依存して生活する³⁴」ことを前提としていた十九世紀後半の女子教育の状況と合致している。実際、当時の現実社会における教育内容も次のようなものだったとされる。すなわち、「教育内容は非常に制限されたもので、自然科学系の科目はほとんど無視され、中心となった教科は英語、フランス語の会話、礼儀作法、それに家政指導である。またサロンへの習熟と社交術も重視される³⁵」。このように、あくまでも表面的で限定的な「家における三使命である妻・主婦・母になるための統一的な教育³⁶」を通過したと思われるルルは、あらずじで述べたように3人の男性の妻としての立場に収まった。

さらに、ルルの市民社会での立場に関して、上流市民階級の妻としての特徴を見出せることも指摘したい。十九世紀末には、富裕な上流市民階級において女中が「市民的家政に欠くことのできない構成要素³⁷」となっており、「女中がいるということは外にたいし、その家の妻は働く必要のない「無為」の身分であることを示威し、これによって社会的に自らを区別した³⁸」。このように記される「女中をもつ「無為」の妻」にルルは合致している。第一幕、第一の夫ゴルとの婚姻時は、物語がすべてシュヴァルツのアトリエで進行するため、言及されるにとどまるが、女中の存在が示される。

ルル 家には家政婦がいるわ。
シュヴァルツ その方が相手してくれますか？
ルル とても趣味のいい人よ。
シュヴァルツ 何の趣味です？
ルル わたしの着付けをしてくれるわ。³⁹

第二幕、第二の夫シュヴァルツとの婚姻時には、女中ヘンリエッテが登場し、ルルとのやりとりを見せる。ヘンリエッテはシュヴァルツが首を掻き切って自殺した際に、医者呼びにやり警察に届け出る役割も果たしている。

ヘンリエッテ（入口ドアから、腕に帽子の箱をかかえ、手紙類をのせた盆をテーブルの上にのせる）郵便でございます——これから婦人帽子屋さんに帽子を持って参りますが、奥様、まだなにかご用がございますか？

ルル 何もないわ。⁴⁰

第四幕、第三の夫シェーンとの婚姻時には、女中が実際に登場したり、その存在が言及されたりすることはないものの、馭者フェルディナントが来客の案内と給仕を行ない、ルルの働きに取って代わる役割を果たしている。このようにどの男性との結婚時にも、ルルの生活には女中あるいはそれに類する役割の人物が駐在している。この点からもルルに上流市民階級の妻の典型的要素を見ることができる。

こうした上流市民階級の妻としての立場は、シェーンの斡旋があつて初めて可能になるものではあるが、ルル自身の能動性も要件となっている。シェーンに対するルルの次の発言には、ルルの作為といえる「芝居」によって結婚をめざす姿勢を見出せる。

ルル [中略] あなたはわたしに、ゴル博士と結婚しろって命令したわ。そこでわたしはゴル博士を結婚する気にさせたわ。あの絵描きと結婚しろと命令された時も、わたしはひどい芝居をいやな顔ひとつせずに行ったわ。⁴¹

ルルのその能動性とは、先に見たように男性に対する対象としての自己の提示に発揮される。ルルは次のように語る。

ルル 自分の姿を鏡にうつしてみたとき、わたしは男になりたかったわ……（言葉を中断して）夫になりたかったのよ！——

アルヴァ どうやら君は、自分が夫に与えている幸せが素晴らしいので、夫をうらやんでいるようだね。⁴²

ルルの台詞は原文で“Als ich mich im Spiegel sah, hätte ich ein Mann sein wollen…*sich unterbrechend mein Mann!* —— ”⁴³（下線は引用者による）であることから「夫になりたかった」は、夫という立場ではなく、自分の夫になることへの羨望を示すものと理解できる。このようにルルは鏡にうつる自分の姿を見て自分の夫になることを想像することから、男性に対する魅力的な外見と、妻としての立場を連続するものとして認識しているといえる。

また、ルルの父親を自称し⁴⁴、作中で唯一社会的属性が不明のシゴルヒに、市民社会に位置づけられず、死に近い存在としてのニュアンスを含みもつ「腐れ肉」である「俺たち」と括られることを拒否する。ここでは肌を美しく見せるための「パウダー」が、シゴルヒからルルを区別するものとして引き合いに出されている。ここでも先の例と同様に、外見の魅力

と市民社会における妻の位置を連続したものと捉えるルルの認識を見出せる。

シゴルヒ 俺たちは腐れ肉さ。

ルル よしてよ！ あたしは仲間に入れないで！ わたしは毎日香油カムフェットでマッサージして、それからパウダーをはたいているのよ。⁴⁵

こうしてルルは妻となって市民社会に迎合している。ただ、女子教育の目的でもみたように、「家における三使命である妻・主婦・母」⁴⁶の母役割は果たしていないため、母にならないルルの男性への帰属は不完全とみなされうる。

ゴル そうだな——わたしには子供がいないもんでね。

シェーン (ポケットから煙草入れを取り出して) でもまだ結婚して二、三ヶ月しか経っていないじゃありませんか。

ゴル いませんよ。子供なんか別に欲しいと思いませんな。

シェーン 煙草はいかがです？

ゴル (煙草をとって) わしには、あれ一人で十分ですよ。⁴⁷

ゴル博士は老齡であるにせよ、彼にとってルルは子どもをもうける相手ではないと表明している。くわえて、ルルはひとりの男性の妻であると同時に、婚外の男性とも関係を維持しつづけることは、一夫一婦制の結婚が、婚外の男性との関係を解消する理由として機能していないことの現れである。したがってルルは、前述のクランプ＝カナベが「妻と母親、そして家庭の主婦としての義務のほかに、女性は、結婚をすると、とりわけ性的な貞節にしばりつけられる」⁴⁸と特徴づける規範的な女性像から逸脱している。

こうした部分的な逸脱を指してルルの自由奔放さが語られることがある。たとえばドイツ文学者の荒木詳二は「セックスにおいて男性の支配を受けない自由な女」⁴⁹とルルを評価する。ここで荒木はシゴルヒの台詞「この女は、セックスを売りものにして生活することはできないんだ、何故って、この女の人生は、セックスそのものなんだからな」⁵⁰に依拠している。この台詞は、その他の解釈においてもルルを規定する要素としてよく引き合いに出されるが、同じくシゴルヒによる「こいつにはまず、情欲の火ってやつを石炭みたいにかき起こしてやらなくちゃ駄目なんだ」⁵¹という台詞の矛盾からも、シゴルヒの評価にすぎないことは明らかだろう。

たしかにルルは、母にならず、婚外の男性とも関係をもつ点では規範的な女性から外れる。しかし同時に、男性を基盤とした生存が前提されている点で、ルルの立場は社会秩序に合致しているのである。また、次節で取り上げるが、ルルに対して献身的な女性ゲシュヴィッツ伯爵令嬢による逃亡の提案を拒否し、差別的発言⁵²さえ浴びせることにも、社会秩序との合致が見出せる。このようにルルは、社会秩序を支える異性愛規範にラディカルに違反する行動は行っていない。

そのようにして妻として市民社会に生存の拠点を維持しているのなら、秩序を揺るがすことはないにしても、ルルはしたたかに生きる主体的な人物であるといえるかもしれない。実

際、たとえば文学史家のハンス・カウフマンは、ルルを次のように評価している。「ルルーが自分の利益のためにブルジョア社会の状況と人間とを食いものにしうるかぎり、そして社会の表層を満足げに泳いでいるかぎり、彼女は社会状況に、社会状況は彼女にふさわしくみえるのであり、彼女の本性は社会状況の本性を反映しているのである」⁵³。同様に、荒木による『地霊』のルルは、大地の精霊、すべての女として存在し、すべての男は自らの快楽の道具でしかない。しかし男はそのことがわからないので没落する。両性の戦いは女性の勝利に終わる」⁵⁴という評価は、ルルが女性という属性を根拠に男性に帰属して生存の拠点を得る一方で、夫となる男性は全員死ぬことについていえば、妥当そうだ。

ただし男性たちの死因を振り返ると、ルルが起点になっていることは確かだが、より正確に言えば、男性のルルにたいする期待や理想像が破綻したことが原因である。たしかに、シェーンは直接ルルに手を下される点で、ゴルやシュヴァルツの場合と等価に考えることはできない。しかし、ルルに惹かれながらも道徳的観点からはルルを回避したい葛藤を、ルルにピストル自殺を迫る形で解消しようとした結果、そのピストルで殺されていることを考慮すれば、やはりシェーンの認識を原因としても不適切ではないだろう。それゆえ男性の死とルルの生存は別の事象として捉えるべきである。男性の犠牲者としての側面から、ルルの女性としての「勝利」者としての側面を引き出す解釈は男女の対立を自明視したものだといえる。

これは翻って、ルルが女性として犠牲者であるということ強調するものでもない。前述の吉田による「ルルには、自分が社会によって偽装へと強制されていることがわからない。〔中略〕彼女は自発的にそうしていると思っている」⁵⁵という指摘は、暗にルルが「自発」性を働かせれば社会の強制から逃れられることを前提にしている。しかし、社会から切り離された個人は存在しないのだから、ルルの行動が社会に迎合することとルルの「自発」性のなさを直接に結びつけることはできないだろう。

ここで挙げたルルの評価は、対象としての自己を示して男性に帰属するルルの行動を、一方では割り切った手段として、もう一方では社会による強制の結果として措定している。しかしこれらは、「男性の側から見るか、ルルの側から見るか」といった解釈者の立場に回収される相互排他的な性質ではない。ルルの行動をこのどちらかの性質に還元するとき、ルルの行動もまた、男性との間の権力関係を生成することが等閑視される。行動が権力関係の転覆という形で現れずに、維持されつづけるにしても、ルルの行動はそこに反映されている。男性に対して対象としての自己を提示し続け、そこに客体性を見出されることを、男性たちへの従属として特徴づける必然性はない。つまり、ルルの男性に対する客体としての位置が固定的にみえるとしても、その位置を保持するには、既存の権力関係に加担する行動を継続的に伴っている。

たとえば、ルルの次の発言からは、そうした権力関係に加担したうえでそれを利用する様子をわかりやすく見て取れる。ルルが踊りの舞台で気を失った直後、楽屋にやってきたシェーンとのやりとりにおける発言である。

ルル（ここから先、場の終るまで、つねに優位に立つ）分る、あなたがおこると、わたしはとても幸せなのよ！ あなたがありとあらゆる手段を使ってわたしをおと貶しめると、わたしはそれを誇りに思うのよ！ あなたはわたしをとってもひどく、

女に対してこれ以上はできないくらいひどくわたしを卑しめたわ。そうすればわたしの上に立てると思うからね。でもわたしにいろんなことを言って、それで結局口には言えぬほど自分を苦しめることになったのね、あなたを見ていて、それが分るわ。⁵⁶

この「あなたがありとあらゆる手段を使ってわたしを貶しめると、わたしはそれを誇りに思うのよ！ あなたはわたしをとってもひどく、女に対してこれ以上はできないくらいひどくわたしを卑しめたわ」という発言を、世紀末の美術と文学に繰り返し登場する典型的女性像のパターンを分析したブラム・ダイクストラは、「男が自分に対して暴力的になるまではその男に本当に興味をひかれることはない」マゾヒスティックな性質の表れと解し、「自分に対して男が暴力を振るうことを、その男に対する自分の支配力の証拠と見なしており、おそらく、この知識のおかげで、暴力が彼女にエロティックな刺激となるのだ」と分析する⁵⁷。たしかにこの一部分だけ切り取って字義どおりに受け取るなら、ルルは貶められることの喜びを語っているといえ、マゾヒスティックな女性像との一致を見せる。しかし、後半の「でもわたしにいろんなことを言って、それで結局口には言えぬほど自分を苦しめることになったのね」との発言は、ダイクストラの取り上げる前半の発言に、遡及的に皮肉の機能を生じさせる。したがってこれはむしろ、ルルを客体として思いどおりにできるということになっているシェーンの認識を、攻撃の要素として利用する機知と理解できる。この権力関係の利用は、ルルがそもそも権力関係に加担していることの証左といえる。

こうした権力関係内部からの抵抗可能性について、哲学者のジュディス・バトラーは、「私」は、いわゆる自分の「行為能力」^{エイジェンシー}を、それが対抗しようとする権力諸関係そのものに巻き込まれていることを通じて引き出している部分がある。従って、権力諸関係に巻き込まれていること、さらには「私」が対抗する権力諸関係によって力能を付与されていることは、権力諸関係の既存の諸形式に還元可能であることを意味しないのである⁵⁸と語っている。つまり、自身に見出される客体性を相対化する発言は、自ら対象性を示す行動と、権力関係への加担を前提にしている点で共通する。そのように権力関係に加担しているということは、客体としての位置を保持するだけではない可能性をもち、実際ルルはここでそれを示している。

ただ、この権力関係において客体であることについて、ルルは拒絶感も表明している。たとえば、シェーンに対して、現在の夫シュヴァルツについて次のように不満を述べる。

ルル（やさしく懇願する）あの人を誘惑してくれない。あなたはその道にはくわしいんでしょ。あの人をよくない仲間とつきあわせてよ。知り合いもいろいろあるんでしょ。あの人にとってわたしはただの女でしかないの。わたしひどく傷つけられているのよ。ほかの女を知ればもっとわたしのことを誇りに思うでしょう。あの人には区別がわかっていないのね。わたしは夜となく昼となく知恵を絞って、あの人を心をやすぶってみるの。絶望のあまり、カンカンを踊ってみせることもあるわ。でもあの人はいくびをして、猥褻なことを口走るくらいなのよ。⁵⁹

ルルは、自分がシュヴァルツにとって「ただの女でしかない」ことを嘆いてみせるが、その現状の解決策として動員しようとするのが「ほかの女」であり、かつ、現に行なっているのはカンカンを踊るという行為である。もっぱら「ただの女」としてまなざされることを解消しようとするなら、女性性以外の評価軸の導入が必要である。つまり「ほかの女」との比較における卓越や、外見的魅力を示す行動は逆効果といえる。ルルは、女性としてのみ評価されることを拒否しながら、性的含意をももつ外見的魅力を顕示するという、背反した行動を同時に行なっている。

同様に、第三幕で出演する舞台では、ルルは自身の踊りの商品としての性質を冷静に自覚したうえで、値踏みされることに対する忌避感を示す。

アルヴァ 僕は客が気違いみたいに昂奮してくれれば十分なんですよ。

ルル わたしは自分が気違いみたいに昂奮してみたいわ！

アルヴァ あなたにはそのくらい昂奮するのは何でもないことだと思いますがね。

ルル わたしが舞台に出ているのは、もっと大きな目的のためだからって、あなたが驚くことはないでしょう！ 客席のなかの何人かは、舞台を見ながら心のなかでわたしを値踏みしているのよ。——そっちを見なくても感じでわかるのよ。

アルヴァ どんな風を感じるんです？

ルル 他人のことは頭では察しがつかないものよ。誰でもみんな、自分ひとりが不幸な犠牲者だと思っているんだから。

アルヴァ どうしてそんなことが感じられるんです？

ルル 背筋にぞっと冷いものが走るからよ……⁶⁰

実際、上流階級の許嫁とともに鑑賞にやってきたシェーンを前にして舞台上でルルは気を失い、その後、再び舞台へ戻るよう急くシェーンとアルヴァを拒む。

アルヴァ 急に気を失ったんですか？

ルル お願いです、閉めて下さい。

アルヴァ とにかく舞台には出て下さい。

ルル あの人を見た？

アルヴァ 誰をです？

ルル ^{いいなづけ}許嫁の方といっしょだったわ。

アルヴァ 許嫁と……（入ってきたシェーンに）そんなお遊びはやっていただきたくなかったですね。

シェーン どうしたんだい彼女は？（ルルに）いったいどうしてあの場面をわたしにあてつけてあんなにたっぷりやったんだね。

ルル わたし、どやしつけられたような気がしたのよ。

〔中略〕

アルヴァ そのまま席にいればよかったのに！（ルルに）僕はどうしたらいいか言って

下さい。(外からノックの音) 支配人だ。(叫ぶ) すぐいきます、すぐいきますよ、ちょっと待って下さい。(ルルに) まさか上演を中止する羽目にはおこまないでしょうね!

シェーン (ルルに) さあ舞台に行くんだ!

ルル ちょっとだけ待ってちょうだいよ。今は出られない。わたし死ぬほどみじめなの!

アルヴァ あんな舞台の張り物なんて悪魔にさらわれるといい!

ルル 次のナンバーに差し替えてくれない。あれならわたしが踊ってなくても気づく人はいないわ。でなきゃ五分休ませて。足の力がすっかり抜けちゃったのよ。⁶¹

この場面では、ルルが一方的に価値をはかられること、とりわけ女性という評価軸の俎上にすでに乗っているということ⁶²、その評価を下される場へ強制されることが示され、これらが重なって、失神と脱力という形でルルに拒否反応を起こす。この態度は一見矛盾しているといえるかもしれない。つまり、権力関係に加担している限り、男性たちにとっての客体であることは避けられないにもかかわらず、ルルは自らの行動の帰結を拒んでいることになる。

本節では、ルルは男性に帰属することによって生存していることを確認してきた。それはとりもなおさず、対象性を客体性と認識される権力関係への加担を意味するが、ルルは客体として認識されることを拒否している。つまり自らを生存可能にする客体性を拒むという一見矛盾した態度を示している。

第三節 死の原因としての客体性

ルルは男性たちに向かって対象としての自己を提示し、男性たちはルルを客体と認識して接する。ルルは自分が男性たちの客体であることに拒絶感を示すが、そうした男性たちに帰属して市民社会に生存している。ただし、このようなルルの行動が市民社会に拠点を確保する効力を発揮するのは、シェーンの実際的なバックアップのあるうちに限られる。つまり、シェーンがいなくなれば、男性たちを惹きつけたとしても、それは妻としての安泰な立場をもたらさない。

シェーンは、ルルの結婚を斡旋するだけでなく、新聞社主筆の立場を使って、ルルの夫の社会的成功を後押ししていた。すでに堅固な社会的地位にあったと思われる⁶³ 衛生顧問官ゴル博士については結婚後の介入は明言されないが、二人目の夫シュヴァルツについて、シェーンは「彼にいろいろつくしてやった」⁶⁴、「君の夫には地位をつくってやった」⁶⁵と述べており、画家としての地位を高める工作がなされたことが窺える⁶⁶。こうしたシェーンの援助により、ルルは男性を惹きつけておけば市民社会に立場を得ることができた。息子アルヴァの舞台での成功もシェーンの助力によるものだったことが示唆される。

アルヴァ でも観客は退屈しているようには見えませんでしたよ。

シェーン そりゃ勿論さ! 半年も前から、わたしが新聞を使って成功するようにお膳立てをしといたんだからね。⁶⁷

このように『地霊』第三幕の時点で行なわれた上演はシェーンの「お膳立て」によって盛況であったのに対し、『パンドラの箱』第一幕で、アルヴァは「あのドラマは、例外的に自由文芸協会が上演してくれただけだった。親父おやじが生きていたうちは、僕の創作はドイツのどこの劇場でもやってくれた。だけど今はすっかり事情が変わってしまったなあ」⁶⁸として、シェーン存命時と比較した上演機会の落差を述べる。

こうしたシェーンの役割をふまえれば、ルルによるシェーン殺害は、単にルルが殺人犯になるだけでなく、シェーンの援助を断ち切るという二重の意味で、ルルの市民社会での生命線を断つ行為であった。『地霊』幕切れにおいて、ルルがアルヴァの前に身を投げ出しながら発する「アルヴァ、あなたの欲しいものをおっしゃい。法の手わたしを引きわたさないでちょうだい。わたしがかわいそうよ。まだ若いんだもの。一生あなたに誠をつくすわ。あなただけのものになるわ。わたしを見て、アルヴァ。——ねえ、わたしを見てったら！ 見てよ！」⁶⁹という懇願は、それまでと同様の市民社会での立場を保証するものにはなりえない。シェーンの死によって、ルルの行動の引き出す男性に対する客体としての立場は、市民社会で生存する機能を失った。そして、単に男性たちが恣意的に扱えるという性質のみが残される。つまり、ルルの行なってきた、男性たちに対して対象としての自己を提示する行動は、限定的な条件のもとで、市民社会での生存に結びついていたことが晒される。

そうした状況下、『パンドラの箱』第二幕でルルは、警察への密告を脅しに娼婦になるよう迫る女術カスティ＝ピアーニを、次に引用するように繰り返し拒む。この主張は「例外」⁷⁰ではなく、第二節終わりにみた、客体であるということに対する拒絶感と共通する。

ルル （きっぱりと）私はそんな職業にはむかないわよ。⁷¹

ルル （プライドをもって、澄んだ声で）あんた方の永遠の正義なんてわたしには関係ないわ！ わたしがおめおめとそんな歓楽の宿にとじこめられてはいないってことは、あなたにもよく分ってるはずじゃないの。⁷²

ここで、ゲシュヴィッツ伯爵令嬢は次のように具体的な逃避の手段を提案する。しかしルルは、娼婦になるよう脅迫する張本人であるカスティ＝ピアーニに対しては「あなたといっしょならアメリカにでもシナにでも行くわ」⁷³と表明する一方、ゲシュヴィッツに対してはアメリカ行きを断る。

ゲシュヴィッツ あたしはまだ、あなたとふたりで、一等船客になってアメリカに行けるくらいの財産は、まだ十分持っているわ。アメリカに行けば、あなたは、どんな追跡の手も逃れられるのよ。

ルル （満足そうに陽気に）あたしは、ここにいたいわ。他のどんな町に行ったって、これほど幸せにはなれないもの。⁷⁴

ルルは、男性たちを基盤に生存する以外の可能性が提示されたうえで、それを排除している。つまり、あくまでルルの生存には男性との関係しか想定されていない。結局、この時点

で帰属しているアルヴァの所有する財産がなくなり、ルルは娼婦になる。最初の客であるフニダイ氏は、ルルの発言を次のように封殺する。

ルル また、あたしを訪ねてきてくれる？
フニダイ氏 (彼女の口をふさぐ)
ルル (何か絶望したように天をふり仰ぎ、首をふる)
フニダイ氏 (コートを羽織り、ニヤニヤ笑いながら彼女に近づく。彼女は彼の首っ玉にしがみつく。彼は静かに身をふり放して彼女の手にはキスし、戸口の方に向く。彼女は彼を送って行こうとするが、彼は、手振りで部屋にのこっているようにしらせ、物音をたてずに部屋を出て行く)

[中略]

ルル (全く抑揚のないしゃべり方で) あの男ったらほんとうにいらいらしてしまおうわ！
アルヴァ 君にいくらくれたかい？
ルル (同じような調子で) これで全部よ！ おとりなさいな！ あたし、またおりていくから。⁷⁵

これまでと同様、一方的なはたらきかけに対し、ルルは「何か絶望したように天をふり仰ぎ、首をふる」身振りや「全く抑揚のないしゃべり方」によって拒絶感を見せるが、引き続き身体が危険にさらされる娼婦の役割を遂行しつづけ、最終的に切り裂きジャックに殺害される。

以上のように、『地霊』でルルは生き残り『パンドラの箱』で殺害されるという対照的な幕切れを並べると、『地霊』と『パンドラの箱』では、つまりシェーン殺害前後では、ルルの運命は反転したかにみえる。一方で共通項も指摘できる。すなわち、ルルは常に男性との関係を維持しつづけるという単純な事実である。

こうした男性との関係の維持は、本稿で退けてきた枠組みでも指摘されてきた。まず一方でそれは、ルルの「欲望」「性的魅力」「情欲」として言い表されている。この評価は第一章第一節にみた解釈に基づく。この解釈に分類できる評価を示す相良守峯は、たとえば、まず『地霊』について、ルルの性欲を軸にして次のように解説する。「女の悪魔的なエゴイステイックな性の力は、当然征服を志す男性の力との衝突を来さねばならぬ。〔中略〕実にこの久遠の女性は我等を曳いて地獄にゆかしめると云ふべきである。〔中略〕彼女は運命であり、原理であり、人間ではなくて、ただひたすらに女である。〔中略〕「地霊」四幕は、彼女が自分の欲望の犠牲となつて斃れた男の死骸を踏み越えてゆく勝利の歌である」⁷⁶。こうした『地霊』解釈をふまえて『パンドラの箱』について「彼女が怖るべき倫落の道を辿つて遂に破滅に至るまでの経路を描く。快樂の最後の満足は、ただ自己破壊によつてのみ得られるからである」⁷⁷と論じ、ルルの死を、『地霊』から引き続くルルの欲望の必然的な帰結として位置づける。同様に、「ルル二部作」の一貫性を荒木は次のように表す。「性的魅力ゆえに、周りの人間を引きつけはするが、衝動的な生き方が身についたルルは結婚、逃亡、売春といつも人におぜん立てされるばかりで、男をつまむ以外は受け身な生き方をする女として描かれてい

る。しかし、セックスそのものであるルルとルルに群がる男女の戦いと破滅が、『地霊』と比べると『パンドラの箱』のルルは悪女ぶりに精彩がないとはいえ、『ルル二部作』の一貫したテーマであることに変わりはないであろう⁷⁸。このようにルル個人の特性によって男性との関係を理由づけることは、本章第二節で示した、作中に描かれる社会状況が無視している。他方で、男性と関係を保ちつづけることは、社会の強制によるルルの「意志の欠如」⁷⁹の表れでもない。ルルはむしろ自ら男性との関係を維持している。ゲシュヴィッツ伯爵令嬢を拒絶したことも思い出したい。

ルルによっても、二部作を通じて共通の権力関係が維持されつづけた。それは、ルルが男性の対象でありつづけ、男性がルルを客体と認識する関係である。その権力関係にルルは、市民社会に拠点を得る機能を失ったあとも加担しつづける。このように、ルルが自身の生存のために権力関係を利用しきれていないということからは、その権力関係への加担を生存の手段として意識的に選び取っているわけではないことがわかる。単に、加担する行動に能動性が発揮されているのみである。

以上で示してきたように、ルルの生存を可能にするのも不可能にするのも男性であった。具体的には、ルルは男性に帰属することで市民社会に拠点を建て生存し、帰属する男性が財産を失い働かない状況⁸⁰で売春し、最後に生存が断ち切られた。それをふまえれば、ルルが市民社会に生存しているうちから男性にとっての客体であることを拒否してきたのは筋が通っている。こうして、客体であることの拒否とは、自身の生存の制御不可能性に対する拒否として読み替えることができる。

ルルは、男性に向かって対象としての自己を能動的に提示しつづける。その行動をルルが意識的に選択したわけではないため、男性に客体として認識されるという結果を拒否することによってのみ、ルルは自身の生存の制御不可能性への拒絶を表明した。『地霊』と『パンドラの箱』で、まったく異なった運命にルルが投げ込まれたのではない。ルルは二部作を通じて、男性の介在によって自身の行動が生存にも死にも結びつくという、その制御不可能性を拒否していたのである。

第三章 批判の射程

「ルル二部作」は一般に、第一章第一節にみたルル解釈を前提に、市民道徳の腐敗や脆さがルルによって暴かれる戯曲として位置づけられる。しかし以上の読解をふまえれば、それにとどまらない問題系が浮かび上がってくる。ここでは本稿での読解に基づいて「ルル二部作」のもつ批判の射程を提示したい。

ルルを女性に付与されるイメージや役割の観点から考察したボーヴェンシェンは次のように評価している。「この作品について相反する解釈があるのは、この作品がオープンであるためである。〔中略〕作品の完結性に固執する解釈は、ルルという役柄の意義をひとつに確定しようとして、女性的なるものの因襲化されたさまざまなイメージが、この作品では屈折して提示されていることを無視している。むしろルルは、このような月並みなイメージは交換可能だと、身をもって示しているのである」⁸¹。ボーヴェンシェンはこのように、恣意的に付与されてきた「女性性」の定義の交換可能性をルルに見出す。作中でルルに一方的に与え

られつづける解釈を、単に与えられているものとして距離をとるこの評価は、研究史において際立っている。しかし、ボーヴェンシェンはルルの死について「結局、彼女は自分の人生を商品化しなければならない。女性の日常という運命は、神話的な出自のルルにもふりかかる。彼女は第二の道を選び、売春婦となる。そしてこんどは彼女自身が破局に見舞われる。淫楽殺人犯ジャックの犠牲になるのである」⁸²と、「売春婦」になるという帰結を、あくまで例外的に処理する。恣意的な「女性性」の定義を飛び越えるルルに肯定的形象をみるのであれば、それにもかかわらずルルが「売春婦」という「月並みなイメージ」に収まって死ぬことを、「女性の日常という運命」と一言で片づけるのではなく、より仔細な考察が必要だろう。

ボーヴェンシェンとは対照的に、第一章第二節で挙げた吉田と日中の依拠する文芸評論家・文芸史家ハンス・マイヤーは、ルルが「人間の身分のどこかに、つまり高貴か卑俗、パミーナかパパゲーナのどちらかに位置づけることのできない、人間ではない、野生の美しい獣」⁸³として描かれていると解釈し、それを否定的に評価する。これは第一章第一節でみたフリッツと共通する立場の表明といえる。そのうえでマイヤーは「彼の啓蒙性は否定されてはならないが、個人の、とりわけ女性の解放の過程を、社会的解放のあらゆる問題から分離している」⁸⁴（傍点は原文イタリック）と語る。ヴェデキントの平等への意識の希薄さを指摘したドイツ文学者のエリザベス・ポア⁸⁵とも重なるこの評価は、『地霊』プロローグにおいてルルが蛇として紹介されることを女性蔑視として批判する文脈に配置される⁸⁶。しかしマイヤーはこの一文によって、権力関係の既存のあり方においてルルの「解放」はありえないことを示唆している。

本稿の読解に基づけば、男性の客体であることが生存の基盤にも死の原因にもなることの両面性を、ルルは体現している。客体として認識された時点ですでに、生存の可否はルルの制御の範疇を離れ出ており、二部作全体を通じて認識されたルルの客体性とは、そもそもそうした致命性を含んでいた。そのルルの客体性を成立させるのは男性の認識だけではなく、ルルの行動でもある。繰り返しとなるが、その行動もルル自身の自明視する認識に基づくものである。その権力関係に関して、社会状況も無関係ではない。吉田がルル解釈を女性という属性ばかりに回収したのは一面的だが、「作品がその産屋である社会的状況から遊離していない」⁸⁷というその適切な指摘をふまえば、社会状況を背景とした権力関係を問題化する視座が開ける。ただその社会状況は、緻密に描写されているわけではなく、外的にはひとつの要素として描かれ、また、抽象化されて登場人物各自の認識に浸透している。

岩淵はヴェデキントの劇作の特徴について「彼がしばしば登場させたのは、ある理念の狂信者である」⁸⁸と指摘している。これをまず『地霊』にあてはめると、ルルに理想を投影する男性たちが、その認識から出てこられず死ぬという構図は見やすい。これをさらに二部作全体に拡大すると、その「理念の狂信」というヴェデキントの筆致はルルにも及んでいることがわかる。男性との関係を基盤に生きるという、『パンドラの箱』においてはもはや不可能となった理念である。

男性たちのみならずルルにおいても狂信していることが常の状態であること、つまり「ルル二部作」には、あまねく個人に認識の変容はないという決定論が通底している。このように本作は、個人がある認識を脱していないことが自己も他者も死に追いやる状況を提示する、逆説的で極端な仕方によって、社会的に共有された権力関係を維持しつづける個人の認識を

批判の射程に捉えている。

おわりに

「ルル二部作」は、ルルの一見矛盾したふるまいを、われわれ読者あるいは観客がどのように捉えるか、方向づけてはいない。つまり、本稿では退けてきたような、ルルのふるまいを衝動や他律に回収する態度も、作品が拒んでいるわけではない。重点をどこに置いて解釈するかによって、多様なルル像と、その物語の様相が立ち現れる。たとえば、市民道徳の腐敗や欺瞞が、自然で自由奔放なファミ・ファタルによって暴かれる、あるいはそれを裏返して、強固な男性支配が、意識を希薄化させて従属するしかない女性によって暴かれる、といったように。どちらも間違いとはいえないものの、そのように茫漠とした図式との合致を指摘するだけでは、この戯曲のアクチュアルな側面が捨象される。

それは、今そこで個人が生成し維持してゆく、そして見かけのうえでは不変の権力関係である。各自の認識を脱しないことによって権力関係が維持されつづけ、その権力関係は社会状況を背景に生じている、この雁字搦めの状況を、ルル自身の生存に対するアンビバレントな行動こそが露呈させる。このように「ルル二部作」は、広く社会的に共有されている非対称な関係が、個人間で実践され維持される状況を提示するその点において、再評価に値する。実際の上演でルルを、理解不能な／無力な他者として統合するのでも、完全に分裂させるのでもない仕方で、具体的に存在させるのは容易ではないと思われるが、現在この戯曲にアクチュアリティを探るのであれば、男性との関係において彼女の行動がなにを行なったことになるのか省察する態度が求められるだろう。

注

- 1 ジルヴィア・ボーヴェンシェン『イメージとしての女性——文化史および文学史における「女性的なるもの」の呈示形式』渡邊洋子・田邊玲子訳、法政大学出版局、2014年、52-53頁
- 2 ドイツ文学者・比較文学者の日中鎮朗は、ファミ・ファタルを描く代表的小説であるアベ・ブレヴォ『マノン・レスコー』（1732）、プロスペル・メリメ『カルメン』（1845）、デュマ・フィス『椿姫』（1848）について、「語り手がいて、破滅した男の話（告白）を聞き取る（男は一人称体で話すのをそのまま書き取るので途中から一人称となる）」という典型的な構成」の共通性を指摘し、その「ファミ・ファタルの物語の必然的な形式」について、「そもそもファミ・ファタルはそう見る男性側の視点があるために成立するのであり、それゆえに、こうした構造が最も効果的にそれを発揮し、また伝達することができるからだ」（日中鎮朗「歴史的、社会的、文学的ファミ・ファタル像の変遷——読者志向性・作者・『マノン・レスコー』——」『言語と文化』14巻、2017年、26頁）と解説している。
- 3 吉田眸「客体としての女性——ヴェーデキント：「ルル」——」『京都産業大学論集 人文科学系列』9号、1981年、101頁
- 4 レオ・ベルク『近代文学に現れたる超人』高橋禎二訳、国文堂、1920年、267-268頁
- 5 同書、270頁
- 6 岩淵達治『表現主義の演劇・映画』、河出書房新社、1971年、351頁
- 7 岩淵達治『反現実の演劇の論理——ドイツ演劇の異端と正統』、河出書房新社、1972年、125頁

- 8 同書、126 頁
- 9 同上
- 10 ホルスト・フリッツ「世紀末文学に描かれた性愛の魔力化」村山雅人訳、J.A. シュモル＝アイゼンヴェルトほか『世紀末』種村季弘監訳・池田香代子ほか訳、平凡社、1994 年、544 頁
- 11 岩淵達治『反現実の演劇の論理——ドイツ演劇の異端と正統』126 頁
- 12 同上
- 13 同上
- 14 エルンスト・ブロッホ『希望の原理 第二巻』山下肇ほか訳、白水社、1982 年、185 頁
- 15 岩淵達治『反現実の演劇の論理——ドイツ演劇の異端と正統』126 頁
- 16 吉田眸「客体としての女性——ヴェーデキント：「ルル」——」107 頁
- 17 同書、113 頁
- 18 日中鎮朗「近代精神におけるファム・ファタルの新しい形——ヴェーデキントの『ルル』と 19 世紀末——」『成城大学共通教育論集』8 号、2015 年、59 頁
- 19 同書、50 頁
- 20 フランク・ヴェーデキント『地霊・パンドラの箱』岩淵達治訳、岩波書店、1984 年、28-29 頁
- 21 同書、27 頁
- 22 同書、37 頁
- 23 同書、55 頁
- 24 同書、98 頁
- 25 同書、78 頁
- 26 ジルヴィア・ボーヴェンシェン『イメージとしての女性——文化史および文学史における「女性的なるもの」の呈示形式』57 頁
- 27 フランク・ヴェーデキント『地霊・パンドラの箱』41-42 頁
- 28 岩淵達治『表現主義の演劇・映画』、河出書房新社、1971 年、351 頁
- 29 岩淵達治「解説」フランク・ヴェーデキント『地霊・パンドラの箱』300 頁
- 30 ミシェル・クランプ＝カナベ「哲学の著作のなかの女性（18 世紀）」内藤義博訳、G・デュビイ、M・ペロー編『女の歴史Ⅲ 一六—一八世紀 2』藤原書店、1994 年、507 頁
- 31 フランク・ヴェーデキント『地霊・パンドラの箱』70 頁
- 32 同書、75 頁
- 33 同書、70 頁
- 34 川越修ほか編著『近代を生きる女たち——一九世紀ドイツ社会史を読む』未来社、1990 年、100 頁
- 35 田村雲供『近代ドイツ女性史——市民社会・女性・ナショナリズム』阿吽社、1998 年、62 頁
- 36 同書、121 頁
- 37 同書、52 頁
- 38 同上
- 39 フランク・ヴェーデキント『地霊・パンドラの箱』36 頁
- 40 同書、53 頁
- 41 同書、113-114 頁
- 42 同書、133 頁
- 43 Frank Wedekind, Gesammelter Werke Bd. 3 (München: Georg Müller, 1924), S. 88
- 44 ルルをシゴルヒの実の娘と思っていたロドリーゴが「じゃああの女はあんたの子供じゃないのかい？」と尋ねると、シゴルヒは「あの女はそんなこと思ってもみないよ」、「おれの娘だってふ

- れまわってただけさ」(フランク・ヴェデキント『地霊・パンドラの箱』130頁)と答える。
- 45 フランク・ヴェデキント『地霊・パンドラの箱』62頁
- 46 田村雲供『近代ドイツ女性史——市民社会・女性・ナショナリズム』121頁
- 47 フランク・ヴェデキント『地霊・パンドラの箱』25頁
- 48 ミシェル・クランプ=カナベ「哲学の著作のなかの女性(18世紀)」496-497頁
- 49 荒木詳二「世紀転換期における性の政治学に関する一考察——F・ヴェーデキントの「パンドラの箱」におけるルルの死をめぐって——」『群馬大学社会情報学部研究論集』2号、1996年、174頁
- 50 フランク・ヴェデキント『地霊・パンドラの箱』253頁
- 51 同書、231頁
- 52 たとえば「あんたは、母親のおなかにいるとき、男でも女でもないできそこないになっちゃったのね。あんたは、あたしたち他の人間とは違って、人間じゃないのよ。男になるには材料不足だし、女になるには頭の脳味噌が足りすぎるのよ。だからあんたは気違いなのよ！」(フランク・ヴェデキント『地霊・パンドラの箱』205頁)という発言を挙げるができる。
- 53 ハンス・カウフマン『ドイツ現代文学批判——危機と変革』今村孝ほか訳、ミネルヴァ書房、1970年、40頁
- 54 荒木詳二「ヴェーデキント『ルル二部作』に見る愛と性——異性愛主義・女性嫌悪・同性愛嫌悪」中央大学人文科学研究所『芸術のイノヴェーション——モード、アイロニー、パロディ』、中央大学出版局、2004年、228頁
- 55 吉田眸「客体としての女性——ヴェーデキント:「ルル」——」104頁
- 56 フランク・ヴェデキント『地霊・パンドラの箱』114頁
- 57 ブラム・ダイクストラ『倒錯の偶像——世紀末幻想としての女性悪』富士川義之ほか訳、パピルス、1994年、179頁
- 58 ジュディス・バトラー『問題=物質となる身体——「セックス」の言説的境界について』竹村和子・越智博美ほか訳、以文社、2021年、163-164頁
- 59 フランク・ヴェデキント『地霊・パンドラの箱』67-68頁
- 60 同書、97-98頁
- 61 同書、108-110頁
- 62 次の場でルルは、シェーンに対して「わたしのいるべきところを教えて下さったあなたのやり方はまちがってなかったわ。あなたの許嫁の前でスカートダンスを踊らせるなんて、あれ以上のひどいやり方は考えられないわね……これで、わたしの置かれている地位をはっきりおっしゃっていただければ、もう言うことないわ」(フランク・ヴェデキント『地霊・パンドラの箱』110頁)と述べる。上流階級の許嫁とともにルルの踊りを鑑賞するシェーンの行動を、他の女性との比較によってルルの価値を確定しようとするものとして、ルルは理解している。
- 63 『地霊』第二幕でルルは「わたしがあの人死んでから遺産を湯水のように使って……」(フランク・ヴェデキント『地霊・パンドラの箱』69頁)と述べる。
- 64 フランク・ヴェデキント『地霊・パンドラの箱』66頁
- 65 同書、70頁
- 66 肖像画ばかり描いてきた(フランク・ヴェデキント『地霊・パンドラの箱』67頁、278頁)シュヴァルツであったが、先に引用したように、ルルとの結婚後ペテルスブルクの国際展への招待状が届く(同書、55頁)。
- 67 フランク・ヴェデキント『地霊・パンドラの箱』93頁

- 68 同書、164 頁
- 69 同書、147 頁
- 70 吉田眸「客体としての女性——ヴェーデキント：「ルル」——」114 頁
- 71 フランク・ヴェーデキント『地霊・パンドラの箱』196 頁
- 72 同書、199 頁
- 73 同書、200 頁
- 74 同書、222 頁
- 75 同書、242 頁
- 76 相良守峯「ウェーデキント」岩波書店編輯『近代作家論』岩波書店、1932 年、13-14 頁
- 77 同書、14 頁
- 78 荒木詳二「ヴェーデキント『ルル二部作』に見る愛と性——異性愛主義・女性嫌悪・同性愛嫌悪」223 頁
- 79 日中鎮朗「近代精神におけるファミ・ファタルの新しい形——ヴェーデキントの『ルル』と 19 世紀末——」50 頁
- 80 なお、財産を後ろ盾にして逃避を提案したゲシュヴィッツ伯爵令嬢に対するルルの拒絶は、ルルが、女性ではなく男性との関係を生存の基盤として想定していることが、金銭的な問題に還元されるわけではないことを示している。つまりルルにとって、関係をもつ相手が男性であるということが重要な要素だといえる。ルルが男性に帰属するのは、金銭的な利害によるものというより、第二節で述べたように、そもそも男性を基盤にした生存を前提にしていることを理由と捉えるほうが妥当だろう。
- 81 ジルヴィア・ボーヴェンシェン『イメージとしての女性——文化史および文学史における「女性的なるもの」の呈示形式』52-53 頁
- 82 同書、62 頁
- 83 Hans Mayer, *Aussenseiter* (Frankfurt (am Main) : Suhrkamp, 1975), S. 131 (邦訳の一部はアッティラ・チャンパイ、ディートマル・ホラント編『名作オペラボックス 22 ベルク ルル』西原稔・浅野洋訳、音楽之友社、1988 年に収録されている。引用にあたって、既訳を参照し、一部訳語を変更している)
- 84 *ibid.*, S. 130
- 85 ボアは、「ルル二部作」における市民道徳への攻撃に進歩性を見出すと同時に、ヴェーデキントの時代的限界を「権利の平等を軽く見たことと、現行の経済関係を超越する視点をもてなかったこと（後略）」(Elizabeth Boa, *The sexual circus —— Wedekind's theatre of subversion* (Oxford, OX, UK ; New York, NY, USA : B. Blackwell, 1987), p. 176) と指摘する。
- 86 ルルを蛇として提示する猛獣使いの台詞に関して、マイヤーと同様の批判、あるいはその台詞をルルを規定する決定的な要素とする論は複数あるが、ボーヴェンシェンによる「サーカスの支配人が観客に向かって、女を恐ろしい自然の生きものとして紹介するのは、別に目新しい出し物ではない。飼い慣らされていない自然の生きものにたいする怖れは、古くからあるモチーフである。しかし作者がこの伝統に棹差しているのか、それともこの伝統を否定しているのかが定かでないため、ルルにおいてはラディカルな女性解放の要請が体现されていると思ひ込む人もいれば、女性蔑視がそのまま受け継がれていると見る人もいる。したがって、ここでこの作品にたいしてイデオロギー批判的な疑念を表明するのは、性急というものだろう」(ジルヴィア・ボーヴェンシェン『イメージとしての女性——文化史および文学史における「女性的なるもの」の呈示形式』53 頁) という指摘にくわえ、そこで語られる台詞は、その意味内容だけでなく観客への口上

という機能とともに検討されるべきだと指摘したい。

87 吉田眸「客体としての女性——ヴェーデキント：「ルル」——」114頁

88 岩淵達治『反現実の演劇の論理——ドイツ演劇の異端と正統』125頁

参考文献一覧

フランク・ヴェーデキント『地霊・パンドラの箱』岩淵達治訳、岩波書店、1984年

Frank Wedekind, *Gesammelter Werke Bd. 3* (München: Georg Müller, 1924)

荒木詳二「世紀転換期における性の政治学に関する一考察——F・ヴェーデキントの「パンドラの箱」におけるルルの死をめぐる——」『群馬大学社会情報学部研究論集』2号、1996年

——「ヴェーデキント『ルル二部作』に見る愛と性——異性愛主義・女性嫌悪・同性愛嫌悪」中央大学人文科学研究所『芸術のイノベーション——モード、アイロニー、パロディ』、中央大学出版局、2004年

岩淵達治『表現主義の演劇・映画』、河出書房新社、1971年

——『反現実の演劇の論理——ドイツ演劇の異端と正統』、河出書房新社、1972年

エルンスト・ブロッホ『希望の原理 第二巻』山下肇ほか訳、白水社、1982年

川越修ほか編著『近代を生きる女たち——九世紀ドイツ社会史を読む』未来社、1990年

相良守峯「ヴェーデキント」岩波書店編輯『近代作家論』岩波書店、1932年

ジュディス・バトラー『問題＝物質となる身体——「セックス」の言説的境界について』竹村和子・越智博美ほか訳、以文社、2021年

ジルヴィア・ボーヴェンシェン『イメージとしての女性——文化史および文学史における「女性的なもの」の呈示形式』渡邊洋子・田邊玲子訳、法政大学出版局、2014年

田村雲供『近代ドイツ女性史——市民社会・女性・ナショナリズム』阿吽社、1998年

日中鎮朗「近代精神におけるファム・ファタルの新しい形——ヴェーデキントの『ルル』と19世紀末——」『成城大学共通教育論集』8号、2015年

——「歴史的、社会的、文学的ファム・ファタル像の変遷——読者志向性・作者・『マノン・レスコー』——」『言語と文化』14巻、2017年

ハンス・カウフマン『ドイツ現代文学批判——危機と変革』今村孝ほか訳、ミネルヴァ書房、1970年
ブラム・ダイクストラ『倒錯の偶像——世紀末幻想としての女性悪』富士川義之ほか訳、パピルス、1994年

ホルスト・フリッツ「世紀末文学に描かれた性愛の魔力化」村山雅人訳、J.A. シュモル＝アイゼンヴェルトほか『世紀末』種村季弘監訳・池田香代子ほか訳、平凡社、1994年

ミシェル・クランプ＝カナベ「哲学の著作のなかの女性（18世紀）」内藤義博訳、G・デュビイ、M・ペロー編『女の歴史Ⅲ 一六—一八世紀2』藤原書店、1994年

吉田眸「客体としての女性——ヴェーデキント：「ルル」——」『京都産業大学論集 人文科学系列』9号、1981年

レオ・ベルク『近代文学に現れたる超人』高橋禎二訳、国文堂、1920年

Elizabeth Boa, *The sexual circus — Wedekind's theatre of subversion* (Oxford, OX, UK ; New York, NY, USA: B. Blackwell, 1987)

Hans Mayer, *Aussenseiter* (Frankfurt (am Main) : Suhrkamp, 1975) (引用に際して以下の既訳を参照、ハンス・マイヤー「ルルそして別のタイプの女の悪魔」アッティラ・チャンパイ、ディートマル・ホラント編『名作オペラブックス 22 ベルク ルル』西原稔・浅野洋訳、音楽之友社、1988年)